

きたたんぼ ひがしながれ
北丹波・東流遺跡(本発掘調査B)

所在地 稲沢市下津丹下田町・下津森町・下津下町西一～三丁目
 (北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒)

調査理由 街路改良工事(都)名古屋岐阜線

調査期間 平成30年6月～平成30年8月

調査面積 630㎡

担当者 酒井俊彦・永井宏幸



調査地点(1/2.5万「一宮」)

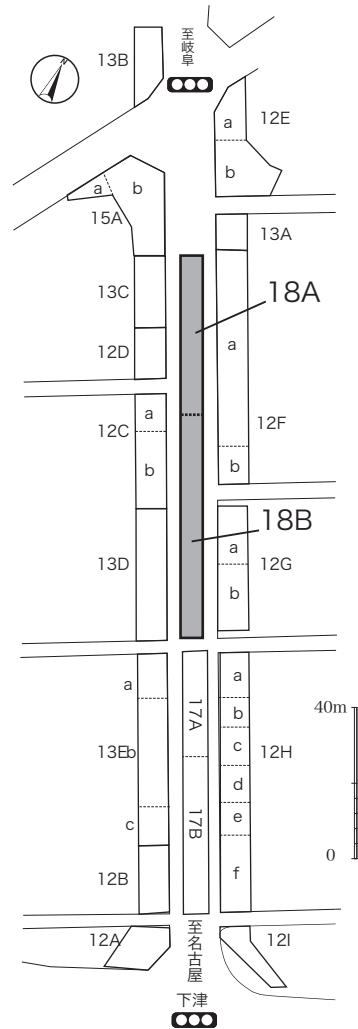
調査の経過 県道名古屋岐阜線の街路改良工事事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、平成24年度に2,320㎡、平成25年度に1,000㎡、平成27年度に390㎡、平成29年度に490㎡おこなった。今年度の調査区は現道部分を対象とし、平成29年度調査区の北側を調査した。

調査の概要 遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況4～5m前後である。

調査の結果、昨年度に引き続き、古墳時代前期、飛鳥時代から奈良時代初頭を中心とした古代前半期、鎌倉～室町時代を中心とした中世、以上大きく3つの時期を中心に遺構が展開していた。遺構は概ね18A区北寄りと18B区南寄りに集中していた。この間には中世以降の流路と近代以降の水田が展開し、中世以前の遺構を削平していた。

古墳前期 古墳時代前期の遺構は18A区北寄り中央を縦断する大溝112SDとこれに合流する小溝115SD、18B区南寄りに小区画水田などを確認した。遺物は廻間Ⅲ式期を中心とするS字甕や壺、器台などが出土している。

大溝112SDは規模と位置、出土遺物から遺跡の北東部にあたる12Eb003SDと同一遺構である可能性が高い。また、この大溝112SDの東側に溝114SDを確認した。調査区外に広がるため規模や方向は確定できないが、位置関係から12Eb003SDに東接する12Eb005SDと同一遺構である可能性があり、溝114SD→大溝114SDの順に掘削された水田に関連する基幹水路と推定できる。今回の調査対象地は水田と畑地が広がると調査前に想定していたが、水田を検出した地点は18B区の南端部のみであった。水田を面として確認できたのは今回が初めてである。この南端部付近の5㎡前後に4区画の水田を検出した。



調査区位置図

調査区位置図(S=1/2000)

南北方向に幅50cm前後の畦畔が調査区中央を縦断し、東西および南端の調査区壁を取り囲むように畦畔状の高まりが検出された。これら水田の上位には東西方向の溝081SDが横断する。水田関連にともなう水路と思われる。

古 代 古代の遺構は、18A区が溝群、18B区南端が竪穴建物群を中心に確認した。
18A区の溝群は南北方向に2条(107SD・104SD)、東西方向に1条(106SD)確認した。いずれも8世紀前葉を中心とする須恵器・土師器が出土している。107SDは断面が逆台形、幅2m前後、深さ0.5m前後を測る正方位からやや西に傾く南北溝である。溝の北端に109SDが接続し、西方へ1mほど屈折する。南端は緩やかに西方へ屈曲し、調査区外へ伸びる。104SDは断面が逆台形、幅1.5m前後、深さ0.35m前後を測り、南北方向の正方位上に伸び、ちょうど東および西調査区壁辺りでクランク状に屈曲する溝である。いずれの溝も両脇に位置する既年度調査区に同一遺構と推定できる溝がない。注目すべき遺物として、これら2つの溝から各1点、「美濃」施印須恵器が出土している。今年度の類例を含めて、都合6点となった。

18B区南端の遺構は、2面に渡って確認した。上位は8世紀前葉を中心とする竪穴建物5棟、下位は7世紀前半を中心とする竪穴建物4棟を検出した。いずれも全体が把握できる建物はなく、柱穴を確認できた建物も少ない。これらのうち上位と下位に各1棟、造付カマドを伴う竪穴建物が想定できた。

中 世 中世の遺構は、18A区北半分と18B区南端で井戸と溝を中心に確認した。いずれも13世紀前後を中心とする遺物が伴っている。

大溝091SDは、南北方向に延びる溝で、断面が逆台形、幅2m前後、深さ0.5m前後を測る。規模と方向から、12Fa002SDと同一遺構の可能性はある。この大溝091SDは中世遺構群の基軸となる溝と考えられる。091SDの北側に井戸2基と幅0.5m前後の小溝4条を確認した。18A区北端近くに展開する井戸111SEと小溝085SD、086SDなどは091SDの方向に平行あるいは直行する配置となる。大溝091SDに近い井戸102SEと溝088SDは平安時代末頃の遺構で、本遺跡では数少ない時期の遺構である。

18B区南端近くの遺構は井戸が2基(051SE・058SE)、溝が1条(008SD)、柱穴と推定できる小穴を含む多数のピットを確認した。051SEの上位は008SDが東西方向に延びる。井戸の上位に溝が配置された組み合わせは12C区、12D区などでも確認されている。051SEは試掘坑で一部欠損しているが、ほぼ全形が把握できる井戸であった。3m四方の平面形、やや南寄りに円形の基底面があり、そこから漏斗状に立ち上がる断面形となり、深度は1.5m前後を測る。曲物など下部構造はなく、上位層と中位層にブロック混じりの斑土層が認められ、廃棄後人為的に埋めた可能性がある。尾張型第5・6型式の椀・小皿をはじめ、中国産青磁皿片が出土した。特筆遺物に方形の陶硯がある。調査区南端の井戸058SEは調査区南西隅がちょうど井戸の基底部に相当する。深度は1m以上を測り、上部の平面形は1辺3m以上を測る方形であろう。

ま と め 5次にわたる調査成果から「美濃」施印須恵器についてふれておく。

「美濃」施印須恵器が6点出土した。これまでの成果から、窯業遺跡以外からまとまって出土する遺跡は、平城宮跡の5点、各務原市広畑野口遺跡の10点のみで、2番目に多い類例となった。また、尾張国府周辺に位置する船橋市場遺跡の2点は「美濃国」施印と刻書である。「国」の有無が時期差を示すと指摘されているので国府造営の変遷を考える上で興味

深い。なお、尾張大國霊神社周辺は国府の推定地として有力であるが、この近辺における同時期の遺構から「美濃」施印須恵器の出土例はない。「美濃」施印須恵器のみで国府造営は推定できないが、8世紀前葉に限定できる須恵器として紀年名と比肩されることと、716（靈龜2）年に美濃国司笠朝臣麻呂が尾張国司を兼任する時に重なることは、考古資料と文献史料の両側面から検討できる稀有な歴史的事象である。（永井宏幸）



古墳前期112SD完掘北から



古墳前期112SD断面トレンチ7北から



古墳前期115SD遺物出土南から



古墳前期18B区水田検出南から



古墳前期18B区水田完掘南から

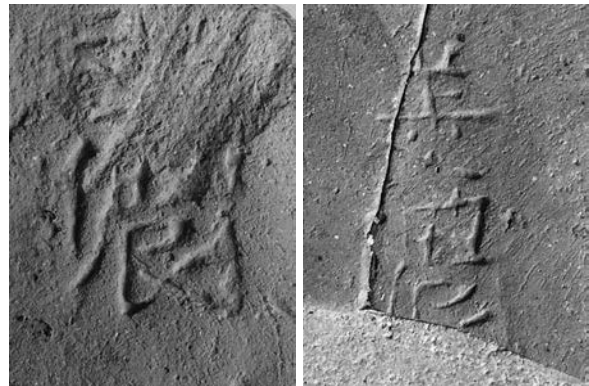


古代18A区107SD北から



古代18A区104SD北から

古代「美濃」施印須恵器

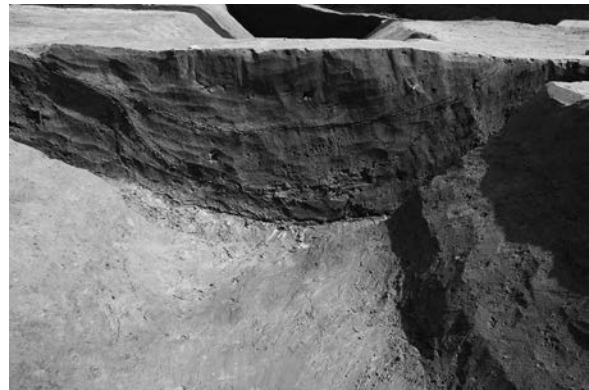


107SD出土

104SD出土



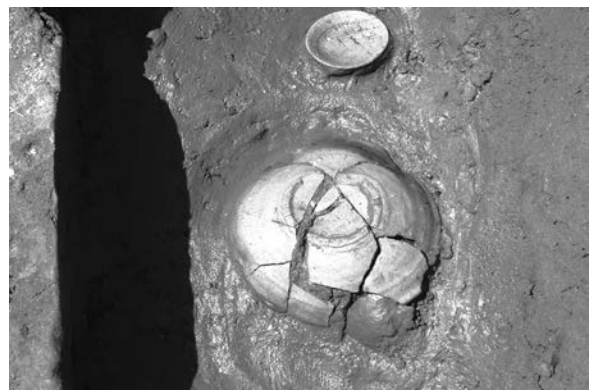
中世18A区全景北から



中世091SD断面南西から



中世091SD完掘西から



中世091SD山茶碗出土南から